

『賃労働と資本』を学ぶ

第6回 四国ブロック

資本とは何か

経済学者たちの言い分

一定の諸関係のもとで

3章「資本とは何か」については、
 ①資本とは何か（P 56・7行目〜P 58・2行目）②資本の本質（P 58・3行目〜P 60・9行目）③搾取の仕組み（P 60・10行目〜P 64・6行目）、この三つのことに内容が分かれています。それらをひとつずつレポートし討論を行っていくこととします。

司会IIまず3章①について、レポートしてもらいます。レポーターは香川県協のMさんです。よろしくお願ひします。

MII経済学者は「資本は、新しい原料新しい労働用具、新しい生活手段を生産するために使われる。資本の構成部分は、全て労働の創造物、労働の生産物であり、『蓄積された労働』である。つまり、今あるものは、それを生産するために費やされた過去の労働が蓄積されて出来ており、新しい生産のための手段として役立つ『蓄積された労働』が資本である。」と主張します。しかしこの説明は、「黒人奴隷とは

何か？ 黒色人種の人間である。というのと同じ程度のものである」というのは批判しています。黒人II奴隷ではなく、黒人は黒人であり、一定の諸関係のもとではじめて奴隷となるということです。それと同様に、綿紡績機械は綿花を紡ぐための機械であり、一定の諸関係のもとでのみそれは資本となり得るのです。これらの関係から引き離されれば資本とは言えないのです。これは、生産において、人間は自然に働きかけるだけでなく、また互いに働きかけ合います。彼らは、一定の仕方方で共同して活動し、その活動を互い

◆特集 みんなの学習講座

に交換することによってのみ、生産するのです。生産するために、彼らは互いに一定の連関や関係を取り結ぶのです。そして、これらの社会的連関や関係の内部のみ、自然に対する人間の働きかけがおこなわれ、生産がおこなわれるのです。

生産・社会的關係

司会 次は、生産手段の性格に応じた生産諸条件も相違するであろう。と語られています。説明して下さい。

M これらの諸関係、互いにその活動を交換し、総生産行為に参加する諸条件は、生産手段の性格がどうであるかに応じて違ったものとなります。本文中では、火器という新武器の発見ともにより軍隊組織が変化した例を紹介しています。

諸個人がそのなかで生産する社会的諸関係（社会的生産諸関係）は、物質

的生産手段が、生産力が変化し発展するにつれて、変化し変動します。生産諸関係は、その総体において、社会的諸関係、社会と呼ばれるもの、しかも一定の歴史的発展段階における社会的独特の、他とは違った性格を持った社会を、形づくってきました。古代（奴隸制）社会、封建社会、ブルジョア社会は、生産諸関係のそういう総体であつて、それぞれが、同時に、人類の歴史上の特殊な一発展段階をあらわしているのです。生産のための道具・機械が発展すればするほど、その社会を構成する諸関係（奴隸所有者と奴隸領主と農奴、資本家と労働者）が変化し、同時に社会も変化します。

経済学者の言い分

M 私からここでは封建社会から資本主義社会のように、社会が変わる原動力は何かということを皆で討論してい

きたいのですが。

司会 わかりました。Mさんの提起はこのレポートを順に討論すると理解が深まると思います。最初に経済学者の主張が書かれ、きれいにまとめられています。疑問に思いませんでしたか。

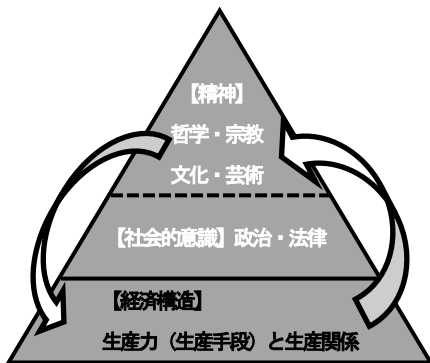
Y 今でも資本といえば企業を起す時の元手であると言われますが、それではマルクスのいう資本の本質という答えになつていないと言っています。

司会 ここは単純に読み進めると、経済学者の主張は疑問に思いません。しかしそうではないと、マルクスはさらに深く立ち入って説明しているようですが。

Y マルクスは、『賃労働と資本』を通して、資本主義が成立する仕組みを明らかにするべく、この第3章では冒頭で資本の本質をつかんだ後に、資本主義の搾取の仕組みを明らかにしようとしています。商品交換というものはすでに、原始共産制の終わりごろ、奴

◆ みんなの学習講座

隷制に移行する辺りに共同体の相互の物々交換として出てきますが、原始共



社会の上部構造・下部構造

下部構造である経済構造が変われば上部構造である社会的意識や精神にも影響を及ぼし社会が変わる。

上部構造から強制的に経済構造への影響を及ぼすこともあるが、きわめて弱い。

共同体の内部にも剰余生産物が生まれ、物々交換から商品が生まれました。つまり交換を目的に商品が生まれてきたということですね。

こうして生まれた商品が封建制社会のなかでさらに発展し、交換するための貨幣が生まれてきます。原始共産制の時代にも石や貝殻などを用いての交換はありましたが、貨幣として発展したのは封建制の時代です。そして貨幣による商品流通の発展により資本が成立をしていく。つまり歴史的に資本が成立する前提条件は商品と貨幣ということになります。このような歴史的な経過もふまえて理解をすべきであるということ、経済学者のいうことは答えになっていないというわけです。

司会IIでは本文に戻って黒人奴隷とは何か、木綿紡績機械は何かという一節を、少し具体的に考えてみましょう。

ここで一定の諸関係であることが条件のように書かれています。黒人は単に

黒人、紡績機械は単に紡績機械という物でしかない。しかし何らかの条件により奴隷や、役割を持った紡績機械になるといいます。

HII 奴隷所有者がいて買う商人もいて初めて黒人が黒人奴隷と言える。売るために木綿商品を生産することで紡績機械として成り立ち、一定の諸関係のなかで初めてそう言えるということですね。

司会II 次には、「これらの関係から引離されればそれは資本でないことは、金がそれ自体として貨幣でなく、砂糖が砂糖価格でないのと同じである。」とマルクスは述べています。見た目は金や砂糖であるけれども、ある一定の諸関係によりそれが貨幣や価格を持った砂糖になるのです。わかりますか。

YII ここで、「一定の諸関係のなかでのみ」と書かれています。このとらえ方はまさに弁証法です。ここに紙とペットボトルのお茶があります。風が吹

◆特集 みんなの学習講座

いて紙が飛びそうになった時、ペットボトルのお茶を紙の上に置きました。先ほどまで喉を潤す役割であったペットボトルのお茶が、今度は重石としての役割に変わりました。このペットボトルのお茶は、私との関係の時には飲み物として、紙との関係になると重石として本質を変えました。そういう風

に諸関係、条件も含め物事を見ることに必要であるということです。

司会 金や砂糖も関係が変われば本質も変わる。一定の諸関係のなかで資本は資本となるということですね。

Y 木綿紡績機械の場合は、資本主義的生産関係のもとで初めて資本となるということですね。経済学者がいうように、生産手段や原料など新たな生活手段を生産するために使われるものが資本本というなら、原始共産制の時代から資本があったということになります。

司会 二ここまで理解できましたか。経済学者がいつていることが正しいよう

に聞こえますが、さらにそこから弁証法的に物事をとらえると本質が見えてくるのですね。

Y 二ここで経済学者が言っていることは、現実の社会では、まさに資本です。これが現象です。しかし、その本質は何かとなれば、歴史的にこの資本が生まれてくる過程を考えないと、本質は見抜けないということです。

K 二この部分までをさらに深く学習しようとするれば、『空想より科学へ』1冊をやることになりました。すごく詳しくこのことが書かれています。

自然に働きかけるとは

司会 二では次に進みます。生産において人間は自然に働きかけるとあります。が、どういうことでしょうか。

H 二豆腐を例にとつて説明してみます。まず原料である大豆を生産、収穫する人（農家）がおり、その大豆を生産業

者が買って豆腐を生産します。そこには豆腐を製造するための機械や、にがり、水などが必要ですがこれもまた他の各生産業者がいてはじめて豆腐という商品ができあがります。その後その販売を仲介する卸業者や輸送業者、販売店があり消費者に渡ります。このように一つの商品には様々な業者や消費者が関係し、それぞれ関係を取り結んでおり、そこにはそれぞれ労働がなされているということです。

司会 二自給自足の場合、その関係はどうなっているのですか。

T 二生産は行われるけども、家族のなかだったり、自分自身のためだったり共同体内で消費する生産物であり交換を目的とする社会的な生産物ではありませんね。

Y 二商品生産でなく、ただの生産物ということですね。

司会 二同じ生産物でも、諸関係によって性質が変わるといえることですね。

◆みんなの学習講座

Y II P 57・3行目からP 58・2行目
「生産において人間は・・・人類の歴史における特殊な一発展段階を表す。」の間で、社会発展の法則、つまり唯物史観について簡潔に述べています。このテキスト自体が唯物史観に基づいて書かれていますが、人間は、猿の一種が樹上生活から地上生活に移行し人間動物となります。そして2足歩行へ移行し、かつ人間労働によつてはじめて生きることができ、かつ労働によつて社会を維持することができたのです。そのなかで特にこの労働手段の発達によつて生産力も上がり、社会を変えていく基になるのです。その最初の労働についてここではまず強調しています。原始共同体から発展して社会が変わっていくなかでも土台はやはり労働であったということです。そのなかで人間は相互に一定の関係を結びながら社会をつくってきました。原始共同体ではまだ階級がなく、生産物は共

同所有であった。生産力の発展とともに剰余生産物ができ、それを私的に所有する者が生まれ階級が発生しました。支配するものと支配されるものの発生です。最初は馬や牛に労働させていたものが、人間に置き換わる。奴隷の発生です。さらに生産力が上がり、奴隷所有では効率が悪くなると、領主が農民を奴隷として効率よく支配していく封建制へと移り変わります。生産力が発展すると生産関係も変わり社会が展開していくということです。つまり先ほどまで議論してきた、一定の諸関係というもの。紡績機械が一定の諸関係のもとでのみ資本となるということ。これを、奴隷と奴隷所有者、封建領主と農奴というように、社会の発展という唯物史観を用いて説明しているのです。

行動とはまったく違う。この人間の行動をマルクスは『労働』といい、『資本論』で次のように述べている。『蜜蜂はその巣の構造において、建築家を顔色なからしめる。しかし、最悪の建築家であっても、最良の蜜蜂のおよばない特性を持つている。それは労働の前に、まず頭の中で設計図を描くということである』と。人間の自然にはたつきかける労働とは、はっきりした目的意識をもった行動である。この点が本能により巣をつくる蜜蜂の行動とは区別されるのである。人間が、まず自然にはたつきかける行動は、この労働である。」と書かれています。

司会 II 次に、軍隊の例が出ています。「火器という新武器の発見とともに、必然的に軍隊の内部的な組織が変化し・・・種々の軍隊の相互関係も変化しました。」というくだりですが、新武器とは鉄砲ですね。鉄砲ができるまで軍隊内部の組織も変化し、個々の結びつき

◆特集 みんなの学習講座

まで変わってくるということです。

Y Ⅱこれは他の書籍で、「鉄砲の伝来は1543年で、我が国の軍事上の変革に及ぼした影響は絶大でかつ急激であった。それは、騎馬兵同士の従来の戦闘から、歩兵の集団戦闘を主体とする戦闘への移行を決定的にした。伝来から僅か32年後の長篠のたたかいで、織田軍は3000丁の鉄砲を使用し、騎馬隊主体の武田軍を壊滅させて、鉄砲足軽の存在を不動のものとした。1600年の関ヶ原のたたかいでは、鉄砲足軽の割合は40%近くに上った。」とあります。軍隊の組織そのものが変わったのです。

司会 Ⅱ次は、人間は生産においては必ずお互いに一定の関係を結び、その関係は生産手段の性格によって違ってくると言います。P 57・11行目から「そのうちで個々人が生産する社会的諸関係、すなわち社会的生産諸関係は、・・・そのおのおのは同時に、人

類の歴史における特殊的な一発展段階を表わす。」とあります。

最初にレポーターから、社会の変化発展について議論がしたいとありましたが、それがまさにこの最後の部分で、歴史的、論理的につかめたのではないのでしょうか。

H Ⅱ生産諸力が発展すると、生産諸関係も変わると言う社会発展の法則、唯物史観ですね。P 42の図で下部構造と上部構造の関係も理解できました。人間労働が加わっても必ずしも「生産物Ⅱ商品」ではない時代があり、狩猟民族や農耕民族、牧畜などで生活していたけれど、食料の保存ができるようになり、それを共同で所有することにより社会が形成されたこと。そして自然に働きかける人間労働が歴史を創ってきたことも分かりました。

Y Ⅱ生産物と商品との違いですが、なぜ生産物が商品になったのかというと、生産手段が私的所有になり、社会的に

分業が発達するからです。例えば農業をするには、耕作機械が必要で、それを専門的につくる者がいます。彼らは農作物を作らないので、そのままは生きていけません。ですからその機械を売って貨幣に替え、食料を手に入れなければなりません。こうなると初めて生産物が商品になったのです。

司会 Ⅱここで3章①の討論を終えて行こうと思います。ここで駆使していかなければならないのは唯物弁証法です。唯物弁証法は変化をとらえる学問です。物事を分析する時に、ある時点だけ取り出して結果を導くことも分析の方法の一つではありますが、物の動きやその物が周りの自然と結んでいる関係とを別に分析をしたのでは、その物の現象面はわかって、その連動性や本質、その後の動きをとらえることが困難になります。思考を止めることなくあらゆる角度から物事を本質的にとらえられるようにしなくてはなりません。